

中国語中国関係学科における中国語教育システムの確立と教育効果の 可視化にむけての取り組み

和田 知久 ・ 于 小薇 ・ 伊藤 正晃

1 はじめに

中国語中国関係学科は2009年の開設から3年が経ち、2012年度には完成年次を迎えた。2013年3月には、初めての卒業生を社会に送り出すことになる。教育カリキュラムも「ひと巡り」し、ようやく全体を見渡すことができるようになったが、それは各所に見いだされた問題点を調整すべき時期が到来したことを意味している。

私たちは中国語中国関係学科の中国語コミュニケーション科目を主に担当する教員であり、これまで本学科における中国語教育システムの全般的な検証をすすめてきた。一貫したテーマは、学科教育全体における中国語教育システムのあるべき姿を探求することであった。具体的には、「学科の通常の授業期間を通して行われる中国語の授業と、1年次在籍生の必修科目でもある北京・外交学院での夏期研修との連携」、「中国系の学生や中国語の既習者を対象に実施していた特別クラスの授業内容の検討と充実」、「中国語教育の成果を可視化する手段の一つとしての語彙データベースの構築・拡充と実際の運用」の3点に凝集される。これらの教育分野における研究は、程度の差こそあれ一定の成果を収め、あるものについてはすでに本学科の中国語教育の現場にもフィードバックがなされつつある。

本稿では、昨年度から今年度にかけて実施されてきた、本学科の中国語コミュニケーション科目を主に担当する教員による研究成果と授業についての考察を紹介する。

2 北京夏期研修における中国語学習に関する一考察

中国語中国関係学科の北京夏期語学研修は2009年から始まり、本年度で4回目を迎えた。研修期間は例年と同様に8月第1日曜日からの4週間、つまり今年は8月5日から9月1日までであった。本研修の目的は、すでに『中部大学教育研究』No.11(2011年)に和田の報告があるためここでは触れない。一般的に会話とリスニングの授業は読解能力を習得する上で必要なトレーニングであると考えられるため、本項では、中国語の読解の授業のみを取り上げ、研修プログラムを踏まえ、読解の授業で使用された教材を中心に分析しつ

つ、授業の到達目標を考察していきたい。

2.1 クラス構成と授業時間割

今年は研修二日目に行われた筆記試験と口頭試験の成績によって、クラスAとクラスBの二つに分かれることになった。小学校まで中国で過ごした中国系の学生2名はBクラス、その他の学生17名はAクラスに分けられた。

夏期研修における4週間の中国語の授業は、月曜日から金曜日までの午前中に行われた。二つのクラスの時間割は以下のとおりである。

Aクラス

	1・2限(8:00~9:40)	3・4限(10:00~11:40)
月	読 解	リスニング
火	読 解	会 話
水	会 話	読 解
木	会 話	読 解
金	リスニング	会 話

Bクラス

	1・2限(8:00~9:40)	3・4限(10:00~11:40)
月	リスニング	会 話
火	読 解	会 話
水	会 話	読 解
木	会 話	読 解
金	読 解	リスニング

研修プログラムの授業時間は1コマが45分間で、1科目は2コマ連続で行われた。到着翌日の8月6日(月)に行われたクラス分けテスト及び8月30日(木)、31日(金)は修了試験が行われたため、授業日ではなかった。実際の授業期間は8月7日(火)から8月29日までであった。

2.2 使用教材について

2.2.1 Aクラスの教材について

読解の授業で使用された『初級漢語』は、外交学院対外漢語教研室が今年作成したものである。中国語の発音から基礎会話までの24課で構成されているが、本研修プログラムはその半分の12課まで講義が行われた。

第1課から第4課までは発音篇で、各課は、「語音」と「注釈」、「練習」の3つの部分に分かれている。第5課から第12課までは、基本会話を中心とする読解篇で、各課は基本的に「本文」と「単語」、「文法」、「練習」の4つの部分に分かれているが、本文の内容に応じて「注釈」が加わった5つの部分に分かれている課もある。

第1課から第4課までの発音篇では、現代中国語のローマ字表記であるピンインの声母と韻母、声調の規則を学ぶ。第5課から第12課においては、「本文」と「単語」の部分には、一般的な初級テキストと同様にピンインがついているが、「文法」と「練習」の例文にはピンインの表記がないため、学習者はピンインにたよらず、4週間という短期の学習期間でより多くの漢字の読み方を習得することができる。習得する漢字数は約200字である。語彙面では、常用される単語を中心に、単語数が約140語である。文法の項目では、動詞と形容詞述語文、疑問文及び基本の助数詞の用法が説明される。本文の内容は、自己紹介をはじめ、外出や買い物など様々な場面が設定され、実用的な会話を展開しており、日常的なコミュニケーションに必要な言葉を想定して作成されている。各課の練習問題は、本文の内容に基づいて出題されており、学習者の理解度を確認すると同時に応用能力を高めるものとなっている。

2.2.2 Bクラスの教材について

読解の授業で使用されたテキストは『中級漢語精読Ⅱ』（趙新、李英主編、北京大学出版社、2010年）であった。テキストの本文は主に中国で出版された刊行物や新聞の抜粋を一部加筆・修正したものである。中では現代中国人の暮らしや価値観、中国社会の変貌をストレートに紹介しており、文体も説明文からエッセイ、現代詩まで幅広い。各課は、「単語の解釈」と「本文」、「語句の重点」、「文法説明」、「練習問題」、「閲読材料」から構成されている。単語一覧のみピンインつきで、各課に50語ほどの単語説明がある。語句の重点では、常用される語句を各課に10～12語ほど摘出し、それらの複数の用法を個別に解釈している。文法説明では、各課に10項目ほどの説明があり、中級レベルで必要な学習項目であると見受けられる。練習問題では、選択だけでなく思考を必要とする問題形式に重点が置かれているため、学習者の総合的な語学力を高めるように出題されている。各課の最後にある閲読材料では、新出単語がほぼ見られず、本文と関連のある内容で、文字数が1000字ほどの短文が取り上げられている。それを読むことによって、学習者が本文に対する自身の理解度を確認することができると考えられ

る。

今年度、本学科では中国系の学生のための特別クラスを開講していないため、彼らは普段、中国語でコミュニケーションを支障なくとることができるが、授業時に高度な文章を読む機会が皆無であった。Bクラスの2名の学生にとっては、語学を学ぶだけでなく、いまの中国及びそこに暮らしている人々の生命力が反映された文章に触れることで、行間に書かれた内容をくみ取る力を習得することができたと考えられる。夏期研修プログラムにおいては、Bクラスの開講が本学科の中国語教育の補完的な役割を果たしたと言える。

3 中国語語彙データベース構築に関する諸規則

3.1 中国語語彙データベース構築の目的

本学科では学生の中国語能力を上げるため、週6コマの中国語の講義が開講されている。教員は講義において会話、文法などを指導し、さらに語学検定対策の指導もおこなっている。語学の講義で使われる教材は2、3冊と少なく、語彙数が検定で出題される範囲を網羅しきれていない。学生の積極性も問わなくてはならないが、教員としてはそれを期待して待っているだけでは、学生の語彙力が上がることは期待できない。

そこで、本稿に関わった教員で協議した結果、独自の中国語語彙データベースを構築して、検定の級数、品詞、成語などの項目で範囲を絞り、学生のレベルに応じた単語テストが実施できればという考えに至った。初期段階として検定の級数による分類をおこない、それに伴い漢字の音（音節）による分類を加えて検索による絞り込みができるデータベースを構築することになった。

3.2 中国語語彙データベース構築の手段

データベースの構築に際し、検索しやすい項目として、声母、韻母、声調の音声面ならびに品詞、検定試験の級数を挙げた。初期段階として、音声に特化したデータベースの構築にとりかかった。音声を詳細に入力することで、詳細な検索が可能となるが、実際の音声と文字表記にズレがあるため、構築の前に表記上の規則を理解し、さらに音声と表記のズレに対して新たな規則を設けなくてはならなかった。以下に、それらの諸問題を挙げる。

3.2.1 現代中国語におけるピンイン表記の規則

音節による分類をおこなうために、いくつかの規則を設けなくてはならない。現代中国語は一つの漢字に一音節が対応している。音節にはいくつかの音素が存

在するため、その音素の分類を用いることで、より詳細な検索が可能となる。

音素の分類として、印欧諸語では子音および母音の区別をするが、中国では、古来より漢字の音を二文字の漢字で表わす「反切」という方法が用いられ、「声母」および「韻母」の区別をしてきた。声母は子音に相当し、韻母は母音およびそれに後続する韻尾を含めたものを指す。

現代中国語の漢字音を表記するための「ピンイン」

が規則化されて以降も声母および韻母の区別によって音節の構造を説明している。「反切」では漢字を用いてきたが、「ピンイン」ではアルファベットによる表記に変わった。しかし、現代中国語のもつ音声体系を26文字のアルファベットで正確に表記し分けることができず、同一の文字を使って表記していても、実際の音は同一ではないという音節が存在する。

以下に、現代中国語の音節表を示し、ピンイン表記に伴う規則を挙げる。

	開					口				呼				
	a	o	e	i	er	ai	ei	ao	ou	an	en	ang	eng	ong
ゼロ	a	o	e		er	ai	ei	ao	ou	an	en	ang		
b	ba	bo				bai	bei	bao		ban	ben	bang	beng	
p	pa	po				pai	pei	pao	pou	pan	pen	pang	peng	
m	ma	mo	me			mai	mei	mao	mou	man	men	mang	meng	
f	fa	fo					fei		fou	fan	fen	fang	feng	
d	da		de			dai	dei	dao	dou	dan	den	dang	deng	dong
t	ta		te			tai		tao	tou	tan		tang	teng	tong
n	na		ne			nai	nei	nao		nan	nen	nang	neng	nong
l	la		le			lai	lei	lao	lou	lan		lang	leng	long
g	ga		ge			gai	gei	gao	gou	gan	gen	gang	geng	gong
k	ka		ke			kai		kao	kou	kan	ken	kang	keng	kong
h	ha		he			hai	hei	hao	hou	han	hen	hang	heng	hong
zh	zha		zhe	zhi		zhai	zhei	zhao	zhou	zhan	zhen	zhang	zheng	zhong
ch	cha		che	chi		chai		chao	chou	chan	chen	chang	cheng	chong
sh	sha		she	shi		shai	shei	shao	shou	shan	shen	shang	sheng	
r	ra		re	ri				rao	rou	ran	ren	rang	reng	rong
z	za		ze	zi		zai	zei	zao	zou	zan	zen	zang	zeng	zong
c	ca		ce	ci		cai		cao	cou	can	cen	cang	ceng	cong
s	sa		se	si		sai		sao	sou	san	sen	sang	seng	song

	齊 齒 呼										撮 口 呼			
	i	ia	iao	ie	iou	ian	in	iang	ing	iong	ü	üe	üan	ün
ゼロ	yi	ya	yao	ye	you	yan	yin	yang	ying	yong	yu	yue	yuan	yun
b	bi		biao	bie		bian	bin		bing					
p	pi		piao	pie		pian	pin		ping					
m	mi		miao	mie	miu	mian	min		ming					
f														
d	di		diao	die	diu	dian			ding					
t	ti		tiao	tie		tian			ting					
n	ni		niao	nie	niu	nian	nin	niang	ning		nü	nüe		
l	li	lia	liao	lie	liu	lian	lin	liang	ling		lǜ	lüe		
j	ji	jia	jiao	jie	jiu	jian	jīn	jiang	jīng	jiong	ju	jue	juan	jun
q	qi	qia	qiao	qie	qiu	qian	qin	qiang	qīng	qiong	qu	que	quan	qun
x	xi	xia	xiao	xie	xiu	xian	xin	xiang	xīng	xiong	xu	xue	xuan	xun

	合 口 呼								
	u	ua	uo	uai	uei	uan	uen	uang	ueng
ゼロ	wu	wa	wo	wai	wei	wan	wen	wang	weng
b	bu								
p	pu								
m	mu								
f	fu								
d	du		duo		dui	duan	dun		
t	tu		tuo		tui	tuan	tun		
n	nu		nuo			nuan			
l	lu		luo			luan	lun		
g	gu	gua	guo	guai	gui	guan	gun	guang	
k	ku	kua	kuo	kuai	kui	kuan	kun	kuang	
h	hu	hua	huo	huai	hui	huan	hun	huang	
zh	zhu	zhua	zhuo	zhuai	zhui	zhuan	zhun	zhuang	
ch	chu		chuo	chuai	chui	chuan	chun	chuang	
sh	shu	shua	shuo	shuai	shui	shuan	shun	shuang	
r	ru		ruo		rui	ruan	run		
z	zu		zuo		zui	zuan	zun		
c	cu		cuo		cui	cuan	cun		
s	su		suo		sui	suan	sun		

1. 音節を表記する上での規則

1) 齊齒呼、合口呼、撮口呼に属する韻母が単独で音節を構成する場合（ゼロ声母）は、「y」または「w」で始まる表記に変更される。

2) 韻母「iou」「uei」「uen」が声母を伴った場合、「-iu」「-ui」「-un」のように中央の文字が脱落する。

3) 撮口呼は声母「j, q, x」に後続する場合、ならびにゼロ声母の場合、「ü」は「u」と表記される。

2. 声調符号を付する上での規則

4) 「a」がある場合、必ず「a」の上に付ける。

5) 「a」がなければ、「e」または「o」の上に付ける。

6) 「a」「e」「o」がなければ、「i」「u」「ü」のいずれかの上に付ける。

7) 「i」「u」「ü」が共起する場合、後ろの文字に付ける。

3. 音節を構成する（複音節）上での規則

8) 後続音節に開口呼に属するゼロ声母の韻母が存在する場合、その音節の前に隔音符号（'）を表記し、前音節の韻母との切れ目を明記する。

9) 固有名詞の場合は先頭の文字を大文字にする。

仮に、上記の規則のみでデータベースを構築すると、音節に特化して語彙を抽出する場合、以下の問題が生じる。

10) 同一の文字で表記されていても、複数の異なる音を有する場合がある。

10 a) 「zhi, chi, shi, ri」および「zi, ci, si」で使用されている「i」は [i] の音価を示すものではなく、前者の4音節は [ʅ]、後者の3音節は [ɿ] の音価を示している。

10 b) 3) の規則によって、「u」の表記する音は [u] および [y] の音価をもつ。

11) 固有名詞で表記する大文字は、小文字と区別され、別の音価と判断される。

以上の問題に対し、10 b) の場合は、本来「u」で表記されている音節を「v」と入力することで「u」との混同を避けることができた。また、11) については、データベースを構築する上では、声母および韻母には小文字で入力し、語彙のピンインを表記する箇所、つまり検索結果で表示する箇所には一つずつ大文字に修正するという対応をした。これについては8) も同様の対応をした。10 a) については、妥当な表記方法が見つからず、本来の音節の表記どおりに入力しているため、今後の課題としたい。

現在、新漢語水平考試（新HSK）の級数による語彙の難易度を基に、データベースの構築をおこなっている。このデータベースを利用して、講義の空いた時間または講義時間外で語彙力検定のような試験をおこない、学生が進んで語彙力を増やしていける環境を作る一助になればと考えている。今後は、講義で使用し

ている教材に出てくる語彙を増やし、さらには新語にも対応することで、一層厚みのあるデータベースの構築を進めていく予定である。また、音声面だけでなく、品詞を充実させ、より検索の絞り込みができるように進めていきたい。

4 中国語中国関係学科におけるあり得べき中国語教育システムとは

本項では、中国語中国関係学科における中国語教育システムの到達点と、依然解決を待たれる問題点を検証する。

4.1 本学科の教育課程全体における中国語コミュニケーション科目の位置

『学生便覧』では、中国語中国関係学科の教育の特色を「語学教育を重視し、中国語の高度で実際的なコミュニケーション能力を身につけた上で、政治、経済、文化、ビジネスなど広い視野から中国を理解し、中国・アジアと日本を結ぶ実社会の現場で幅広く活躍できる人材の養成を目指す」としている。これをより具体的に教育カリキュラムの中での科目群で捉えるのであれば、中国語を学ぶ「中国語コミュニケーション科目」と、社会科学や人文科学的な視野から中国について学ぶ「中国研究科目」が学科における教育の「二つの大きな柱」となっている。

実際にも「中国語コミュニケーション科目」は、本学科の教育カリキュラムの中で占める割合は大きい。単位数からいえば、本学科学生の卒業要件とされる総単位数128単位のうち、中国語コミュニケーション科目は必修科目も含めて26単位以上の取得が求められている。これは、国際関係学部その他の学科である国際関係学科、国際文化学科が地域言語科目として、英語を主とした外国語科目の履修をそれぞれ12単位、14単位と卒業要件にしているのに比べると格段に多い。また、本学科の中国語コミュニケーション科目は、一年次春学期の中国語ⅠA・中国語ⅠB、ビジネス中国語Aから、三年次秋学期の中国語ⅥA・中国語ⅥB、上級中国語Bまで、1週間に6コマ開設されており、4年次でも1週間に2コマ中国語を学ぶことができるようになっている。英語と異なり、中国語が初習言語でもあることなど、単純な比較は意味をなさないかも知れないが、本学科が専攻語とも言うべき中国語の習得を重視していることが理解できよう。

また、本学科の中国語教育システムの特徴を挙げるうえで、やはり協定校の外交学院における夏期研修に触れることが必要である。この制度については前項で言及しているが、それ以外にも本誌『中部大学教育研究』ですでに三度にわたり、研修概容から運営、

通常授業との連携や、外交学院と本学科の中国語教育担当教員間の交流についてなど、詳細にわたって紹介と検証を行ってきている。本学科の中国語教育システム全体の中で重要な位置を占めていることは言うまでもなく、今後、本学科の中国語教育システムを充実させていく上で、通常授業との連携がより図られるべきものである。

それに加えて、国際交流センターによる派遣留学プログラムについても言及せねばならない。本学は中華人民共和国において、外交学院もふくめて6大学と学術交流協定を締結しているが、本学国際交流センターによってハルビン理工大学、華東師範大学への派遣留学プログラムが実施されている。プログラム内容にはそれぞれ違いがあり、ハルビン理工大学へは「中国語・中国文化派遣留学プログラム（中級・上級）」として、春と秋に4ヶ月間の派遣を行っている一方、華東師範大学へは「派遣留学プログラム（中級・上級）」として、春と秋に4ヶ月間の派遣を行っているほか、希望し認められれば約1年（10ヶ月間）の現地留学が可能となっている。また、華東師範大学への派遣留学プログラムでは、中国語の研修に加えて大学本科の授業を受講することが可能である。現地で履修した授業については、本学の科目として単位の読み替えが行われ、卒業要件の総単位数に含まれ、本学在籍のまま4年間で卒業が可能であるため、派遣を希望する学生も多いものの、学内選考時に涙をのむものもないわけではない。

本学科の学生もすでにこのプログラムに応募・合格し、各大学に派遣されている。ハルビン理工大学へは、2010年に4名、2011年に1名がそれぞれ4ヶ月間派遣され、華東師範大学へは、2011年に1名が10ヶ月間、2名が4ヶ月間派遣され、現在、2名が4ヶ月間の予定で派遣されている。帰国した学生の中には、比較的長期にわたる現地での生活経験も相まって後述のHSK 5級を取得したものなど、中国語学習の面で大いに成果を上げた者もいるほか、学科教育のもう一つの柱でもある中国理解についてもその進歩がうかがわれ、大学院進学を希望する者も輩出することになった。

4.2 本学科の中国語教育システムの到達点

本学科の中国語教育の成果としてひとつの参照軸となるのは、やはり検定試験の取得状況であろう。本学科で受験を推奨している中国語の検定試験は中国語検定とHSKである。中国語検定は、一般財団法人日本中国語検定協会が実施するもので、1981年から2012年11月までで78回実施されており、わが国における中国語の運用能力を測定する検定試験として代表的な存在である。「中国語学習の準備完了」レベルの準4級か

ら、「高いレベルで中国語を駆使しうる能力の保証」をうたう1級までの6段階に分かれている。また、HSKは中国語で「漢語水平考試」といい、そのアルファベットによる表音表記の頭文字を取った名称である。中華人民共和国教育部の公認する中国語の語学検定試験で、開発や試験問題の作成は中国国家漢語国際推進事務局が行っており、1990年の中国国内での実施以降、2010年にはCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に準拠した改訂を経て、中国語運用能力についての国際的な基準となるべき検定試験である。近年は筆記試験と口頭試験に分かれて実施されているが、筆記試験について言えば、初級レベルの1級から、上級レベルの6級までの6段階に級分けされている。

本稿執筆時現在（2012年9月）、本学科在籍者は85名（休学者も含む）であるが、そのうち検定試験による資格を取得すべき対象となるのは、必修科目でもある「資格中国語」を履修する2年次以降の学生（64名）である。

本学科在籍生の資格試験取得状況を表に示した。表1は級別の資格試験の取得状況であるが、のべ63名の学生が中国語の資格試験に合格している。その中でも最も取得人数が多いのが中国語検定4級であり、取得者総数の6割以上を占めている。実施協会の認定基準によれば「中国語の基礎をマスター」したレベルにすぎず、本学科学生の卒業時の運用能力とするのであれば心許ない限りだが、本学科では2年次の6月に行われる検定試験での全員受験を勧めている。これは、1年次に学んで各自が身につけた中国語の運用能力を、学内の期末試験による到達度の判定のみならず検定という「他流試合」を経験させることによって、「世に認められた能力」であることを実感してもらう意味も持っている。

表1 級別の資格試験取得状況

検 定 試 験 と 級	取得者数
中国語検定4級	41
中国語検定3級	8
中国語検定2級	5
HSK 4級（旧HSK 3級も含む）	2
HSK 5級（旧HSK 7級も含む）	7
合 計	63

表2には、学年別の資格試験取得状況を示した。これによると、2年次以降に在籍する本学科学生のうちなんらかの中国語の資格を取得している者は49名であることがわかる。これは2年次以降に在籍生の76.6%であるが、就職活動などで実際に対外的に自らの「学びの成果」を示すことが求められる4年生について言えば、9割以上の学生が中国語の資格を取得しているこ

とになる。

表2 学年別の資格試験取得状況と在籍者に占める割合

学 年	取得者数	在籍者に占める割合（％）
2年生	22	68.8
3年生	15	78.9
4年生	12	92.3
合 計	49	

また表3が示すように、4級以外の資格取得者はのべ11名であり、中国語検定とHSKを重複して取得している者が2名いるので、それを勘案しても9名の学生が4級取得以降の各自の研鑽によりレベルの面でも向上していることがわかる。ちなみに中国語検定3級は「自力で応用力を養いうる能力の保証」ができるレベルであり、2級は「実務能力の基礎づくり完成の保証」ができるレベルである。また、HSKについても触れなければならない。HSK 4級はCEFRの「B 2（Vantage）」であり、「自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解することができる」などと定義されている。HSK 5級は、「C 1（Effective Operational Proficiency）」であり、「いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる」「社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる」などと定義されるレベルである。つまり、本学科の4年生は高い割合で高度な中国語の運用能力を備えていることになる。

表3 4年次在籍者の各級の取得状況

検 定 試 験 と 級	取得者数
中国語検定4級	8
中国語検定3級	6
中国語検定2級	1
HSK 4級（旧HSK 3級も含む）	0
HSK 5級（旧HSK 7級も含む）	4
合 計	19

本稿執筆時現在、本学科4年生の就職希望者12名のうち、すでに1か所以上の企業から採用内定を得ている学生は10名であり、この割合は全学的に見ても非常に高いものである。就職活動は、ただ外国語の運用能力が比較的高いということだけで成就するものでは決していない。経団連が発表した2012年4月入社の新卒採用に関するアンケート結果によると、採用選考時に企業がもっとも重視する要素は9年連続で「コミュニケーション能力」（82.6%）が第1位で、次いで「主体性」（60.3%）、「チャレンジ精神」（54.5%）の順であったという（MSN産経ニュース、2012年7月30日付記事）

を参照。<http://sankei.jp.msn.com/economy/news/120730/biz12073014090006-n1.htm>)。本学科の学生たちも、政治や経済、社会や文化といった自らの専門とする学問分野で培われた知識や問題解決能力や、自らの熱意や努力、所属するゼミの担当教員のサポートの甲斐あって、希望する企業から採用内定を得ることができたのは言うまでもない。拙速な関連づけが意味を持たないことは承知の上ではあるが、異なる文化や社会に生きる人びとに興味を持ち、それに対して積極的に働きかけを行う姿勢や能力は、本学科においては中国語を習得することによっても身につけられたものであると、中国語教育を担当する教員としては信じたものである。

4.3 本学科の中国語教育システムの問題点

本学科の中国語教育システムを検証する中で、これまでの私たちの実践では対処ができなかった、困難であった点についても考察する必要がある。全力を傾け、あらゆる努力をなしてきたつもりであったが、私たちには成し遂げられなかった事がいくつかある。

まず、本学科の教育システムの中で、中国語を学び身につけることに困難を覚えた学生（学修困難者）への対処が挙げられよう。前述の通り、本学科は1年次春学期から3年次秋学期にかけて、中国語コミュニケーション科目が1週間に6コマ設定されている。つまり、月曜日から金曜日まで毎日中国語の授業を受けることになる（曜日によっては一日で2コマの中国語の授業を受ける日までであることになる）。また、時間割編成の効率もあり、月曜日から木曜日は、1年生と3年生の中国語の授業を1-2時限目に、2年生の中国語の授業を3-4限目にそれぞれ固定して設定している。このことが、学習意欲とは別に、早朝の起床を苦手とする学生にとっては、中国語を学び続けることへの大きな障害となっているようだ。「早寝早起きの規則正しい生活を送るべき」という「指導」も一般的な意味を持つが、学生たちにも斟酌すべきそれぞれの事情があり、怠惰では片付けられない場合も見られた。一日遅刻してしまうと、翌日以降、教室に足を踏み入れるのを極端に不安に思う学生もいた。一日の欠席や遅刻が翌日の欠席や遅刻を生むような悪循環に陥って単位の取得ができなかった（できないでいる）学生もいた。

そのような学生に対し、授業に参加することの心理的な障害が少なくなるよう声をかけ、学生の話に耳を傾け、状況を理解するようにすべての教員が努めていたものの、欠席した授業の内容をキャッチアップできないまま期末試験を迎えた場合が多かったように思われる。

また、中国語コミュニケーション科目の授業時間が多いことは、学修困難者のみに影響を及ぼしたのでは

ないことも指摘しておきたい。「よくできる」「まじめな」学生にも気になる事象を目にすることが時々あった。中国語コミュニケーション科目の教育カリキュラム全体に占める割合が大きいことは前述の通りであるが、そのことは、特に本学科に入学したての学生たちにとって、「中国語を学ぶこと」＝「大学で学ぶこと」という錯覚を生じさせてしまう。「よくできる」「まじめな」学生は、「よくできる」「まじめな」ゆえに入学後の中国語の学習に没頭してしまう。そんな彼らが中国語の学習で達成感を覚えたとき、あるいは何事かの目的を達成したときがその危機の始まりである。外国語の学習はある種の暗号解読に似ている側面がある。検定試験などの「他流試合」で自らの能力が対外的に認知され、暗号解読のスキルを身につけた瞬間、達成感を覚えて「燃え尽き」てしまい、ひどい場合には継続した学習意欲も、他文化や他言語で生きる人びとと実際に意思疎通しようという意欲も失せてしまうことがある。そうなると、中国を理解しようとする関心も薄くなり、中国語はある程度できるものの、中国語が話される地域には興味が湧かないという状況に陥ってしまう。これについては、私たち教員が「暗号解読術」ではない外国語教育を常に心がけることが求められるのであろう（この問題については『ANTENNA』No. 101、2010年12月でも触れた）。

さいごに、中国語既習者、あるいは中国系の中国語に堪能な者への対処は、学科開設以来、解決しきれないでいる問題である。拙稿（『中部大学研究』No.10、2010年）でも触れてはいるが、「特別クラス」を設けることでそのような学生たちにある程度は対処できたのは事実である。しかしながら、英語などそのほかの外国語、場合によっては日本語の授業を履修させるなどして、中国語コミュニケーション科目の単位に読み替えができるような選択ができるよう、教育システムの制度面からの手当が、さまざまな原因により現在に至るまでできていないことは、やはり問題であると言わざるを得ないだろう。

4.4 まとめ

あるべき本学科の中国語教育システムとはどのようなものであろうか。数点提言をすることで本項のまとめにしたい。

問題点を含みつつも本学科の中国語教育システムはすでに一定の成果を上げている。中国語の検定試験の取得人数とその内容からも、本学科の教育の特色である「中国語の高度で実証的なコミュニケーション能力」を身につけることには成功していると言えよう。ただ、教育カリキュラム全体に占める割合は高く、このような結果と投入する教員の人数や教育に割かれる時間と

のあいだに適正な対応があるか否かと問われれば再考の余地はあるかもしれない。

中国語コミュニケーション科目に適正な授業時間数を割くことは今後とも必要なことではあるが、私たちが検討し構築しつつある語彙のデータベースに基づくポキャブラリー・チェックを実施し、それをPCのみならず、携帯電話をはじめ、さまざまなデバイスから利用できるように改良拡張を加えていくことや、自前での開発に拘泥しなくとも、検定など資格試験の対策にすでに効果を上げているサービスなどを導入することで、中国語教育の質と効率をより向上させることはそれほど困難なことではあるまい。可能な部分からEラーニングを導入し推進していくことを提案したい。

授業時間数のみならず、本学の学生の性質や特徴を踏まえた教材を適切に選択することや、一クラスあたりの受講者数についても適切な規模に設定する必要がある。中国語に対する知識は言うまでもなく、受講者の学習面での心理や外国語教育についても造詣が深い教員を養成することも大切である。本学ではここ数年「魅力ある授業づくり」をFD活動の重点目標として設定しており、「授業サロン」など興味深い取り組みを行っている。それらに積極的に参加することで、平素の自らの授業を顧み、優れた経験は共有し、至らぬ点は改善するよすがとすべきであろう。また、学外のワークショップに参加したり、適切な助言者を求めることも必要であろう。

前述のように中国語の運用能力についてもさまざまな水準の学生が入学してくることが明らかになった。初学者のみならず、「特別クラス」の学生たちも学習を進めることで、入学当初よりもより高いレベルの中国語運用能力を身につけられるような教育システムを構築することも肝要である。その際には、留学や派遣プログラムを利用したり、協定校から中国語教員を招聘したりするなど、教育システムに弾力性と多様性を持たせることも必要であると思われる。

教員の学生に対する働きかけばかりが重要なのではない。学生の知的な好奇心を刺激し、主体的に継続して学ぶことができるよう、サポートすることが求められよう。「ファシリテーター」としての教員の役割をあらためて認識すべきである。そして、学び身につけたことをもとに、自らが専門とする地域や分野に働きかけ、発信できるような環境や制度を作り上げることはできないだろうか。

言うまでもないが、これらの教育の方途や手段は、

「なぜこの科目を学ぶのか、この教育カリキュラムに沿って学ぶことで、私たちの学生がどのような能力を身につけることができるのか」といった教育目的や到達目標を明確にかつ適切に設定することから始められるべきである。

5 おわりに

学科教育全体における中国語教育システムのあるべき姿を探求することが、冒頭に述べたとおり私たちの一貫したテーマであった。問題は発見され、よりよいものにあらためるにはどうすべきであるかと検討され、方途を見いだしたあるものは日々の実際の授業に還元され、着実に成果を上げつつある。私たちの探求はやむことはない。学科の教育システムを実際に担当する教員により内側から検証することによって、それらに全体的な調整や改善をはかることがこれからも常に求められよう。一方、教育行政部門あるいは大学の組織自体からの要請などといった、さまざまな外的な要因により、私たちの学科の教育システム全体を見直すことが今後あるやもしれない。ただ、そこで学ぶ若者たちを中心に据えた見直しや改編を行うことが最も重要であることは言うまでもない。

謝辞

本報告における取り組みには、平成24年度特別研究費（CP）「中国語中国関係学科における体系化・普遍化した中国語入門初級教育システムの確立と教育効果の可視化」の一部を使用した。ここにその旨を記するとともに、私たちの教育活動に対する支援に感謝の意を表したい。

参考文献

- ・澁谷鎮明、黄強、和田知久「中国語中国関係学科1年次夏期語学研修報告ー教育の効果と研修の運営に関する考察」『中部大学教育研究』No.9、2009年12月
- ・和田知久、于小薇、伊藤正晃「中国語中国関係学科特別クラスにおける授業実践の紹介ー2009年度、中国語Ⅰ・中国語Ⅱの取り組みについてー」『中部大学教育研究』No.10、2010年12月
- ・和田知久、于小薇、宗婷婷、伊藤正晃「中国語中国関係学科における北京夏期研修と通常授業との連携に向けた取り組み」『中部大学教育研究』No.11、2011年12月

講師	国際関係学部	中国語中国関係学科	和田 知久
講師	国際関係学部	中国語中国関係学科	于 小薇
助教	国際関係学部	中国語中国関係学科	伊藤 正晃